

琉球大学学術リポジトリ

[論説]2000年代における沖縄県からの季節労働者の移動と本土経験

メタデータ	言語: 出版者: 沖縄地理学会 公開日: 2020-03-10 キーワード (Ja): 季節労働者, 移動プロセス, 意思決定, 本土経験, 沖縄県, temporary workers キーワード (En): migration process, decision making, mainland experience, Okinawa prefecture 作成者: 宮内, 久光 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/0002017760

2000 年代における沖縄県からの季節労働者の移動と本土経験

宮内久光

(琉球大学国際地域創造学部)

Migration of Temporary Workers from Okinawa Prefecture during Early 2000's

MIYAUCHI Hisamitsu

(Faculty of Global and Regional Studies, University of the Ryukyus)

摘要

本研究では 2000 年代に沖縄県から日本本土へ移動をした季節労働経験者 130 人に聞き取り調査を行い、彼らの証言から、移動プロセスにおける移動者の意思決定要因について共通性と個別性を、定量的、定性的の両面から明らかにした。さらに、移動先での労働や日常生活の状況について、彼らが語った証言からは、本土での季節労働経験が彼らの本土観と、それに相対する沖縄観を醸成、強化したことが読み取れた。

キーワード: 季節労働者, 移動プロセス, 意思決定, 本土経験, 沖縄県

Keywords: temporary workers, migration process, decision making, mainland experience, Okinawa prefecture

I はじめに

地理学における人口移動研究の視点として、堤 (1987) は (1) 移動者の特性と移動の意志決定, (2) 出発地と目的地の地域的な特性や諸組織, (3) 人口移動流の持つ、方向や量などの特性, の 3 点を提示した。これまで筆者は、沖縄県から日本本土 (以下, 本土) の製造現場や建設現場などへ、「キセツ (以下, 季節労働) に行く」と沖縄で表現される労働力移動に着目し、堤が提示した人口移動研究の視点に準拠して、主に定量的に検討してきた (宮内 2008, 宮内 2009a)。ただし、まだ未検討な視点として、移動者の「移動の意思決定」が挙げられる。

人口移動の意思決定に関して、堤は次のように述べている。

気まぐれで行なわれる移動もあれば、外部的な強制力により移動を余儀なくされる場合もある。しかも、この意志決定過程における判断には個人差も考慮されねばならない。加えて、特定かつ単一の潜在的移動者ですら、時により、場合により、異なる判断を下す可能性が少なくない。こういったことに鑑みると、意志決定過程への直接的アプローチは、極めて困難である。したがって、人口移動のケースごとに、移動の意志決定過程の前後に (潜在的) 移動者に影響を及ぼしたものについて分析をすることが重要になる (堤 1989 : 51)。

このように移動の意志決定過程の解析の困難さを認識したうえで、「移動の意志決定過程においては、潜在的移動者が「どう決定するのか」ではなく、「どう決定したのか」あるいは「どう決定するつもりか」が分析の対象とされる」（堤 1989：51）としている。このようなことを踏まえると、具体的には移動経験者から証言や語り（以下、証言）を収集し、生活史を分析することが重要になってくる¹⁾。もちろん、移動の意思決定は個別的事であることに間違いはないが、証言が多く収集できれば、そこから移動動機や移動先の決定について、移動者間に共通性が見いだされるだろう。結果的に、多くの証言からは定性的分析のほかに、定量的な分析も可能になるのである。定量的な分析が可能になれば、意思決定の類型化や移動者の特性との関係性を検討することも研究の視野に入れることができる²⁾。

生活史アプローチは、移動プロセスだけの考察にとどまらない。移動者の証言からは、移動先での労働や日常生活の状況といった移動後の実態についても明らかにすることができる。さらに、移動経験者が還流後に移動先での経験を評価することで、移動した2つの地域（出発地および到着地）をどのように認識/再認識しているのか、という地理学的な課題を検討することも可能になる。

これらのことを踏まえて、本研究では沖縄県から本土へ移動をした季節労働経験者を対象に、彼らの証言から、移動プロセスにおける移動者の意思決定要因について共通性と個別性を、定量的、定性的の両アプローチから明らかにすること。移動先での労働や日常生活の状況を踏まえて、彼らが本土および沖縄をどのように認識/再認識しているのかを、証言から読み取ることを目的とする。

II. 研究方法と調査対象者の特性

本研究の目的を達成するため、沖縄県に帰還した季節労働経験者に聞き取り調査を実施し、彼らの証言を記録した。沖縄県からの季節労働者の特徴として若年層が多いこと、製造現場への就業が多いことが先例研究で明らかになっているため³⁾、本研究では調査対象者（以下、インフォーマント）を、2000年以降に製造現場で季節労働をした経験

があり、移動時の年齢が10-20歳代であった沖縄県出身者に限定をした。

調査対象者探しおよび実際の調査は、琉球大学および沖縄国際大学の協力学生に依頼して行った。このような調査方法をとったのは、両大学の学生は沖縄県出身者が多く、彼らのパーソナルネットワークを活用するとインフォーマントを探すことが容易なこと、学生とインフォーマントは年齢が近くラポールが築きやすいため、調査に本音で対応して語ってくれ易いこと、沖縄の若者特有のイントネーションや言い回しを含む証言の逐語的記録が可能なこと、などを考慮した結果である。調査をする学生たちには、移動プロセスや移動先での労働や生活の状況、評価などについて、聞き取り項目を示したうえで、あとは自由に会話をしてもらい、色々な証言をインフォーマントが話した通りに記録するように依頼をした。

聞き取り調査は2007年7月～8月、2008年7月～8月にかけて実施し、130人分の証言を得ることができた⁴⁾。各人の雑多な証言を移動動機や労働・日常生活の状況、評価などに分類整理して定性的分析の基礎資料とした。また、証言の内容をデータ化し、定量的分析に提供する基礎資料とした。130人分のデータであるため、定量的分析を行うことには問題はないと思われる。

ところで、インフォーマントたちが本土で季節労働を経験した2000年～2008年は、2002年1月から始まる第14循環景気拡張期（通称、いざなぎ景気）が含まれており、好景気の期間が長かった⁵⁾。この期間における沖縄県からの県外就職者数は2008年の3,069人を極小値、2004年の10,409人を極大値とする範囲で推移している⁶⁾。当時、県内で季節労働者を募集する求人企業は多く、2007年には年間134社を数えた（宮内 2009b）。企業形態をみると、製造企業は7社に過ぎず、業務請負企業や人材派遣企業⁷⁾が公共職業安定所（以下、職安）を舞台に採用活動を活発に行っており、多くの若者を季節労働者として本土に送り出していた。

インフォーマント130人の特性をみよ。性別は、男性が79人（60.8%）、女性が51人（39.2%）である。また、学歴別にみると、中学卒業者が7人（5.6%）、高校卒業者86人（66.2%）、短大・

表1 沖縄県出身の季節労働者の移動動機（複数回答）

移動動機	全体 N=130 人	性別		学歴別		全体 N=130 %	性別		学歴別	
		男性 N=79 人	女性 N=51 人	中等 N=93 人	高等 N=31 人		男性 N=79 %	女性 N=51 %	中等 N=93 %	高等 N=31 %
金銭の獲得	88	53	35	62	22	67.7	67.1	68.6	66.7	71.0
本土生活の経験	42	25	17	31	9	32.3	31.6	33.3	33.3	29.0
精神的な成長	17	9	8	12	4	13.1	11.4	15.7	12.9	12.9
やりたいことがない	16	11	5	13	3	12.3	13.9	9.8	14.0	9.7
沖縄に仕事がない	13	9	4	10	2	10.0	11.4	7.8	10.8	6.5
季節の仕事の経験	9	7	2	6	1	6.9	8.9	3.9	6.5	3.2
他人の付き添い	8	4	4	5	3	6.2	5.1	7.8	5.4	9.7
他人の勧め	7	2	5	5	2	5.4	2.5	9.8	5.4	6.5

注：中等は中等教育卒業程度で、中卒、高校卒、全校種の中退者が含まれる。高等は高等教育卒業程度で、大学院・大学・短大・専門学校の卒業生および在学生在が含まれる。

（聞き取り調査より作成）

各種学校卒業者または在籍者 16 人（12.3 %）、大学卒業者または在籍者 15 人（11.5 %）、不明 6 人である。本調査におけるインフォーマントたちは、沖縄県からの季節労働者全体の特性と比較しても、性別、学歴ともに代表性はあるとみなされる。

インフォーマントたちの移動先都道府県は、判明している 128 人中、愛知県が 84 人で最も多く、全体の 65.6 % を占めている。次いで三重県（9 人、7.0 %）、滋賀県と静岡県（各 7 人、5.5 %）、岐阜県（5 人、3.9 %）と続く。愛知県の自動車産業は 2000 年代に入って順調な輸出に支えられて生産が拡大しており、沖縄県からの季節労働者の 3 人に 2 人までが移動先としている。これは当時の県外就職者の愛知県への就業率とほぼ同じである⁸⁾。

次章からは、集めた証言をもとに、沖縄県内在住の若年者が、本土の製造現場で季節労働するまでの移動プロセスや、製造現場や日常生活での状況、季節労働経験の評価を検討することで、沖縄県からの季節労働者の就業経験の実態や本土に対する認識/再認識を明らかにしたい。

Ⅲ. 季節労働者の移動プロセスに関する意思決定

ここでは、沖縄県内に居住する 10-20 代の若年者が、どのようなプロセスを経て季節労働者として本土に移動するのかを、移動動機、求職経路、企業決定理由の 3 点からその意思決定過程を明らかにする。

1. 移動動機

まず、本土へ季節労働に行くことを決意する移動動機について、インフォーマントの証言から動機を分類・集計して表 1 に表した。これによると、最も多い移動動機は「金銭の獲得」という経済的理由である。全インフォーマント 130 人中 88 人（全体の 67.7 %）までがこれを動機にあげている。宮内（2009a）でも分析したとおり、沖縄県からの季節移動量は経済的要因、特に沖縄県と本土間の賃金格差により説明ができるため、彼らの最大の移動動機も高収入への期待であることは容易に理解できる。

移動者の特性との関連性をみると、「金銭の獲得」を移動動機にあげた割合は、男性で 67.1 %、女性で 68.6 % であり、性別による差異は認められない。

聞き取りでは、次のような証言が得られた。なお、各証言の最後には、順にインフォーマントの性別、移動先都道府県、移動時の年齢を（ ）で表している。

証言 1 高校卒業して（沖縄で）就職したのはいいけどよ、何か給料も安すぎだし、働く時間帯もおかしいし、何か嫌になってしまったわけよ。しかもみんなが学校行ってるのとか見てから、専門学校とか通いたいなあって思ってきたりもしてから、それでキセツ行こうと思ったばーよ。

表2 季節労働で稼ぐ金銭の使用目的（主回答のみ）

使用目的	全体 N=57 人	性別		学歴別		全体 N=57 %	性別		学歴別	
		男性 N=36 人	女性 N=21 人	中等 N=49 人	高等 N=8 人		男性 N=36 %	女性 N=21 %	中等 N=49 %	高等 N=8 %
学費関係	32	20	12	26	6	56.1	55.6	57.1	53.1	75.0
車・バイク関係	11	5	6	10	1	19.3	13.9	28.6	20.4	12.5
生活資金・仕送り	5	5	0	4	1	8.8	13.9	0.0	8.2	12.5
結婚・留学資金	5	3	2	5	0	8.8	8.3	9.5	10.2	0.0
借金返済	4	3	1	4	0	7.0	8.3	4.8	8.2	0.0

(聞き取り調査より作成)

(男性, 岐阜県, 19歳)

証言2 免許を取るのは親が出してくれたんだけど、車は自分で買って。んで、スタンド⁹⁾でバイトしてたけど、あまり貯まらないからキセツ行こうかなあって。3ヶ月で60貰えるっていうし、楽そうだったから。(女性, 栃木県, 19歳)

証言3 高校自体したいことがあって行ったわけではなかったし、俺は勉強なんて全くといっていいほどできなかったし、そんな人間がお金稼ぐには期間工に行くのが一番手取り早いというか、それしかなかったんだよね。(男性, 愛知県, 19歳)

金銭獲得の目的はさまざまである。証言1のように専門学校に進学するための学費を稼ぐ目的もあれば、証言2のように車の購入が目的の場合もある。そして兩人とも学卒後は沖縄県内で正社員やアルバイトとして一度就職しているが、就業先の低賃金な状況に不満を持っている。また、証言3のように、「手取り早い」金を稼ぐ場として季節労働が認識されている場合もある。

聞き取り結果を集計すると、季節労働で稼いだ金銭の使用目的が判明した57人のうち、大学や各種学校などの「学費関係」が32人と最も多く、次いで車やバイクの免許取得や購入など「車・バイク関係」が11人、「生活資金・仕送り」が5人、「結婚・留学資金」が5人、「借金返済」が4人であった(表2)。

インフォーマントの特性との関係を見ると、性別では男性が「生活資金・仕送り」、女性が「車・

バイク関係」に、学歴別では中等教育以下(以下、中等教育)が「車・バイク関係」「結婚・留学資金」「借金返済」など趣味や生活のため、高等教育以上(以下、高等教育)が「学費関係」の比率が高かった。

表1によると、2番目に多い移動動機は、季節労働を通じた「本土生活の経験¹⁰⁾」である。この動機をあげた人は全体の32.3%で、男女間では差は認められない。

証言4 それに、やっぱ若いうちに内地は経験してみたいなあって思ってて、サンエー¹¹⁾もちょっとやめようと思ってたし。そしてついでに友達も欲しかったから、友達の輪を広げにさ。(女性, 愛知県, 21歳)

証言5 本土に行くことは島の人¹²⁾からだと憧れだし、一回生活してみても本土に住もうか考えてみるのもいいかな~と思った。(女性, 三重県, 18歳)

証言6 内地で仕事経験したかったのと、興味があったからキセツ行ったわけよ。なんでその時に就職しないでその年齢で行ったかって言ったら、そのまま沖縄で就職してしまったら、なかなか内地とかに行けないさあね。だから、就職して落ち着いてしまう前に、内地に行きたかったわけよ。一応、就職するのは沖縄で、って決めてたわけさあね。(男性, 愛知県, 22歳)

これらの証言から、沖縄県の若年層の中には本土に対する憧れを持つ者や、本土での就労・生活経験を希望する者がいることがわかる。そして季節労働希望者が考える本土経験というのは、あく

までも自分の生活基盤は沖縄県にあり、本土での生活は一時的なものという気持ちが高い。例えば、証言6では正規職としての就職はいずれ沖縄県内で行うと決めていて、Uターンすることを前提に季節労働を選択しているのである。このように一時的に本土経験を希望する者にとっては、正規雇用よりも短期契約の季節労働の方が適した雇用形態なのである。「本土生活の経験」を移動動機にあげる比率は、インフォーマントの性別や学歴別に差は認められない。

それ以外の動機として、本土での季節労働と日常生活を体験することによる「精神的な成長」（全体の13.1%）、季節労働での仕事自体に興味をもった「季節の仕事の経験」（同6.9%）のような積極的な動機がある一方で、「やりたいことがない」（同13.9%）、沖縄には「仕事がない」（同11.4%）、季節労働を希望している友人知人など「他人の付き添い」（同5.1%）、「他人の勧め」（同2.5%）など消極的・受動的な動機も多かった。インフォーマントの特性との関係を見ると、性別では男性が「季節の仕事の経験」、女性は「他人の勧め」の比率が相対的に高い。学歴別にはどの動機も差は認められなかった。

次の証言7は季節労働を契機に自立したいという「精神的な成長」の、証言8は「やりたいことがない」、証言9は高校の先生が季節労働に行くことを勧めた「他人の勧め」の事例である。

証言7 とりあえず、そろそろ20歳になるやっし。

自立したいし、家から出たかったばーよ。内地にも行きたかったし、ジン¹³⁾もほしくてよ。稼いだかったわけさ。でもなんだかんだ言って1番の理由は、いろんな経験をして、自立したかったからだな。（男性、愛知県、19歳）

証言8 専門学校を卒業したけど、自分がやりたい仕事ははっきりしていなくて、働くことの意義を見つけるためと内地で一度は生活してみたいと思ったから。（男性、愛知県、20歳）

証言9 進路が決まらんで、ぶー太郎しようとしてたわけ。でも、先生が「あんたは働いた方がいいよ。」って言うてから、勧めよったわけさ。それで、高校に求人企業が情報持ってくるのを

紹介してもらったわけよ。（女性、滋賀県、18歳）
証言10 高校卒業して進学もしないし、就職決まっていな、沖縄は仕事無いし、人生経験として一回ぐらいは内地出してみようかなと思ったわけ。あと、高校のとき仲が良かった友達も、就職決まっていなかつたし、外出たいて言うてたから、じゃあ二人でキセツ行ってみるかかってなって、キセツ行くことになったわけ。（女性、岐阜県、18歳）

以上みてきたように、季節労働の動機は金銭の獲得や内地での生活・就業経験をはじめとして様々であるが、借金返済のためのような明確で単一の動機の事例は少なく、多くの移動者は証言10のように複数の動機が重なり合いながら移動を決意している。そしてその背景として、沖縄県における若年層の就職難や低賃金性といった地域労働市場の問題があげられる。

2. 求職経路

季節労働者として本土で就労することを決意した移動希望者は、どのような求職経路で就職先企業を見つけているのだろうか。就職チャンネルが判明した124人についてみると、求職経路は公的機関を経由するケースと、就職先企業に直接連絡するケースに大別できる。そのうち、季節労働移動に介在する公的機関としては、職安と学校の2つがある。特に、職安を経由した人は82人を数え、全体の66.1%を占める。

沖縄県から本土就職する季節労働者の移動プロセスの特徴は、職安が季節労働移動に深く関与する諸組織として機能していることである（宮内2008:48）。2000年代の沖縄県では、季節労働希望者と求人企業が接触する場が職安での現地選考会であった。

証言11 最初は求人雑誌を見て探していたけど、いろいろありすぎてどこの会社がいいのかわからなかつたため、友達と二人で那覇の職安に行った。その時初めて職安に行ったけど、かなり人がいっぱいいたわけ。こんなにいると思わなかつたからビックリしたよ！（女性、岐阜県、18歳）

証言 12 職安で希望の職種・時間帯・給料や自分の持っている資格などを記入する用紙をもらって、記入し提出しました。職安の人と相談してその希望にあった会社があれば、面接の予約を入れて、後日面接。面接では、履歴書を出して話したり、カードを使って軽いテストのようなものを受けたりします。結果は2週間前後に家に通知がきて、面接のときに自分が出した希望日に出発しました。(女性, 愛知県, 20歳)

沖縄県の季節労働希望者は、宮内(2008, 2009a, 2009b)で分析したとおり、就職情報誌から求人企業が提示している収入を含めた勤務条件を把握している。すでに情報誌で意中の企業がある場合は、職安へ行き、企業名を指名すると、職安に駐在している採用担当者から説明を受けることができる。証言 11 のように、就労したい企業が多くて目移りする場合は、職安の職員と相談して企業の紹介を受ける。いずれにせよ、2000年代の季節労働希望者は職安を通して求人企業と接触し、職安の管理下で雇用契約を結ぶというのが一般的であり、証言からもそれが裏付けられた。

学校の紹介により季節労働の就職先が決定したのは4人である。一般的に、学校の就職指導は正規雇用先を紹介する。しかし、2007年3月卒業者に対する求人倍率が中学で0.15倍、高校で0.62倍と低く、正規雇用による就職が決定しない生徒が出てくる。その場合、先述の証言9のように学校の就職指導の一環として季節労働を勧めていたのである。

このように公的機関を介在させて季節労働移動を行う場合のほかに、移動者の約1/3は個人、あるいは個人のネットワークを利用して企業と接触を図り、雇用契約を直接結んでいる。具体的には、就職情報誌や新聞広告から企業の情報を入手し、企業に直接連絡をとった者が21人(全体の16.9%)、家族や友人の紹介を受けて企業に直接連絡をとった者が17人(同13.7%)であった。

季節労働希望者は、職安内で採用面接を受ける場合も、企業の事務所で受ける場合も、採用担当者と勤務条件などを交渉する。1990年代後半以降から製造派遣が認められる2004年まで沖縄県内で

季節労働者を求人する企業は、業務請負企業が多い。業務請負企業は全国各地に業務委託を受けた製造現場を有するため、季節労働希望者のさまざまな要求、例えば希望したい勤務地域や職種などに対応することができる。逆に採用担当者と交渉をしているうちに、勤務地域や職種が最初に希望していたものとは異なった形で雇用契約が結ばれる場合もある。

証言 13 面接だけだったよ。いろんな事聞かれるかなって思ってたけど、意外と楽だった。友達と一緒にだったからあんま緊張なくて済んだし。(女性, 愛知県, 20歳)

証言 14 友達の紹介だったから面接とかマジで一げー¹⁴⁾だったぜ。こんなんでいいば?とか思ったし。(男性, 愛知県, 20歳)

証言 15 T社の場合は特に、大手の企業であるから、面接の際、スーツで来ないと、まず採用はありえない。現に、自分の友人が、T社との面接に私服で来て注意されたし、採用してもらえなかったんだ。(男性, 愛知県, 18歳)

採用担当者との面接では証言13や14のように、思っていたより簡単に採用が決まり、拍子抜けする場面が多かったようである。しかし、証言15のように面接の服装や態度を重視する企業もあり、特に大手企業ほどその傾向は強いと認識されている。

3. 就職先企業の決定理由

前節では、季節労働希望者が求人企業と連絡をとるまでの経路について考察した。本節では最終的に就職先企業を決定した理由について明らかにする。

聞き取りでは企業決定に最も重視した点を尋ねた。回答を得た112人のうち、「金銭面」が41人(36.6%)が最も多く、次いで「勤務内容・形態」が24人(21.4%)、「経験者からの評判」が22人(19.6%)の順で続いた(表3)。特性との関係を見ると、性別では男性は「経験者からの評判」や「企業イメージ」を、女性は「勤務内容・形態」や「友人・知人の有無」を相対的に重視する傾向が、学歴別では、中等教育以下が「金銭面」「勤務内容・形態」を、高等教育以上が「企業イメージ」をより重視する

表3 雇用先企業の決定理由（主回答のみ）

決定理由	性別		学歴別		雇用形態別		性別		学歴別		雇用形態別			
	全体 N=112 人	男性 N=67 人	女性 N=45 人	中等 N=78 人	高等 N=28 人	直接 N=73 人	間接 N=39 人	全体 N=112 %	男性 N=67 %	女性 N=45 %	中等 N=78 %	高等 N=28 %	直接 N=73 %	間接 N=39 %
金銭面	41	25	16	31	9	25	16	36.6	37.3	35.6	39.7	32.1	34.2	41.0
勤務内容・形態	24	12	12	19	5	12	12	21.4	17.9	26.7	24.4	17.9	16.4	30.8
経験者からの評判	22	15	7	14	6	2	2	19.6	22.4	15.6	17.9	21.4	2.7	5.1
企業イメージ	11	8	3	4	4	17	5	9.8	11.9	6.7	5.1	14.3	23.3	12.8
友人・知人の有無	9	4	5	6	3	1	0	8.0	6.0	11.1	7.7	10.7	1.4	0.0
勤務地域	4	2	2	3	1	8	1	3.6	3.0	4.4	3.8	3.6	11.0	2.6
寮など福利厚生	1	1	0	1	0	8	3	0.9	1.5	0.0	1.3	0.0	11.0	7.7

注：直接は製造企業による直接雇用、間接は業務請負企業や人材派遣企業による間接雇用を表す。

（聞き取り調査より作成）

傾向がみられた。

証言 16 トヨタだから給料高そうやし〜、親もトヨタならいいって言ってたし、それ以外はないよ、特に。（男性、愛知県、20歳）

証言 17 まず最初に飛行機代がもらえたし、あと祝金¹⁵⁾。なんか「よくここへ来てくれましたー3万円」みたいなのもらったし、半年の契約が終わる最後の月には、給料とは別に30万ほどもらえたから。（女性、愛知県、21歳）

証言 18 コンピューターの部品のような小さい物を扱うとノイローゼになりそう。自動車の組み立てならそんなことはなさそうだから。（男性、愛知県、19歳）

証言 19 そこが儲かるって聞いてたから。ねえねえ¹⁶⁾の話では、なんか友達の知り合いが沖縄戻ってから、130万の車現金で買ったって言ってたから、すげーみたいな感じで。（女性、愛知県、20歳）

証言 16 と 17 は金銭面の条件の良さが、証言 18 は勤務内容が、証言 19 は金銭面に関する経験者の体験談が就職先企業を決定させた理由といえる。金銭面では、基本給や残業代の高さはもちろんのこと、証言 17 でもみられるように、交通費や就職祝金、満期退職慰労金などプラスアルファの部分も考慮しているのである。ここでは就職先企業を決定した最大の理由を集計したが、その理由は当然ながら一つだけの場合は少なく、季節労働希望

者はいくつもの肯定的な理由を総合的に判断して企業を決めているのである。

そのようにして選択した就職先企業をみてみると、インフォーマントたちは39社と雇用契約を結んでいる。そのうち、愛知県に本社が所在するデンソー（47人）とトヨタ（18人）に集中しており、2社だけで50%を占めていた。

証言 20 トヨタとデンソーは、県内でも評判の良い会社だし、待遇がいい。特に寮無料っていうのは大きいよ。そりゃ、大企業だからこそなんだろうけど。本当は、トヨタの仕事内容より、デンソーの方が、厳しくないっていうから、デンソーにしたかったんだ。でもね、デンソーって、一番人気だったから、1ヶ月待ちって言われて・・・なるべく早く、本土に稼ぎに行きたかったから、待ちのないトヨタにしたんだ。（男性、愛知県、18歳）

トヨタとデンソーは大手企業という信頼があるうえ、証言 20 にみられるように、寄宿舎が無料という金銭的なメリットがある。両社ともこれまで多くの沖縄県出身者が季節労働しており、その評判もよい。そのため、この2社に季節労働希望者が集中しているのである。

季節労働者の雇用形態として、トヨタやデンソーのように製造企業が直接沖縄県内で求人活動を行い、季節労働者を雇用している形態を直接雇用、業務請負企業や人材派遣企業が労働者を雇用して

製造現場で作業に従事させる形態を間接雇用とする。インフォーマント 130 人のうち、直接雇用は 78 人、間接雇用は 52 人であった。

表 3 から雇用先企業の決定理由を雇用形態別にみると、回答のあった 112 人¹⁷⁾ では、製造企業による直接雇用では、「企業イメージ」(23.3%) や「勤務地域」(11.0%) が相対的に高かった。これは、直接雇用の大部分を占めるトヨタとデンソーのイメージが良く、信頼がおける企業と認識されていたこと、また、勤務地も愛知県を中心とする東海地方であること、それらを季節労働希望者たちが重視していた結果を反映している。一方、間接雇用では「金銭面」(41.0%) や「勤務内容・形態」(30.8%) の条件が良いことを決定理由としている傾向がみられた。これは、職安での現地選考会で業務請負企業や人材派遣企業が、人気のあるトヨタやデンソーよりも魅力的な雇用条件を提示しており、それを期待して季節労働希望者たちが雇用契約を結んでいたことを示している。

IV. 季節労働者の本土就業先での状況と評価

本章では本土に移動した沖縄出身季節労働者が、就業現場や日常生活でどのような状況の下で過ごしていたのか、その実態を明らかにする。さらに、多くの季節労働者は移動前に職安などでの現地選考会で、求人企業から雇用条件などが示されたうえで意思決定をして移動をしている。移動後に就労や生活を経験した結果、それぞれに対して移動前に提示された諸条件と比較してどのように感じたのか、その評価を考察する。

1. 就業現場での状況

まず、沖縄県出身の季節労働者が本土の製造現場でどのような作業に従事しているのかを明らかにするために、聞き取りで得た 123 人分の証言を集計した(表 4)。

それによると、全体では「製造・組立」が 71 人(57.7%) で最も多く、次いで「検査」が 38 人(30.9%)、「製造と検査」の両方が 9 人(7.3%)、「運搬」が 4 人(3.3%) であった。性別にみると、男性では「製造・組立」が 68.1%、女性では「検査」が 45.1% で最も多く、製造現場では性別役割が顕著にみられる。

証言 21 その工場では、携帯のカメラあるさー。その部品の組立て。最初行く前は、カメラの組み立てとかチョー細かそうで難しい事を想像していたけど、実際は簡単で安心した。(男性、愛知県、20 歳)

証言 22 5 畳くらいの部屋を 2 つ行ったり来たりしながら、作業を行っていた。ひとつの部屋は、窓のようなものに、電子回路が浮かび上がっているからそれを点検する。もうひとつの部屋は、顕微鏡で覗いて確認するという作業。その繰り返しだった。(男性、三重県、23 歳)

証言 23 前工程で車のボディに塗られた錆止めの塗装の不具合をチェックするところで、もし、きれいに塗装が塗られていなかったら、その部分を中腰の姿勢でサンドペーパーでひたすら擦る。流れ作業なもんで、全然追いつかないんすよ。もう相当きつかった。腰にくるんすよ。(男性、愛知県、20 歳)

いずれも極めて単純な作業で、証言 21 のように思ったより簡単だと感じた者は多い。もちろん、証言 23 にみられるように、現場によっては肉体的に負荷がかかる作業に配置された者もいた。また、流れ作業のため、慣れない最初の頃は規定時間内に作業が終わらず、ラインを止めて周りに迷惑をかけたという証言も多い。そのうち、作業にも慣れてくると単純な作業ゆえに、作業そのものが苦痛になっていく。

証言 24 仕事内容は単純なことでも同じことの繰り返しだから、マジで頭がおかしくなりそうだったさあ。(女性、愛知県、20 歳)

証言 25 車に必要なネジがエスカレーターのように流れて来る。ネジに不良品がないかチェックする仕事で楽しくもないし、早く終わらな一と思いつながら時計をみているよ。(男性、愛知県、19 歳)

証言 26 同じ作業を何ヶ月もずっとやるから、自分は何をやっているんだろう。自分にとって何のためになるんだろうって。(女性、岐阜県、18 歳)

このような仕事の単調さに苦痛を感じていた、

表4 沖縄県出身の季節労働者の従事作業

従事作業	性別			性別		
	全体 N=123 人	男性 N=72 人	女性 N=51 人	全体 N=123 %	男性 N=72 %	女性 N=51 %
製造・組立	71	49	22	57.7	68.1	43.1
検査	38	15	23	30.9	20.8	45.1
製造+検査	9	5	4	7.3	6.9	7.8
運搬	4	2	2	3.3	2.8	3.9
その他	1	1	0	0.8	1.4	0.0

(聞き取り調査より作成)

という証言は86%のインフォーマントから得られた¹⁸⁾。証言にもみられるように、作業中に何度も時計を確認し、自分の労働の意味に対して自問自答を繰り返し、単調さに耐えながら製造現場で作業を続けていたのである。

彼らの勤務形態は、現場によっては不規則で残業も多かった。

証言27 3名1組ぐらいで、昼夜交替制だったばーよ。昼勤と夜勤を一週間交替ずつでやるわけさーな。で、昼勤は8時10分から始まって5時に終わるんだけど、残業があるわけさ。その残業が1時間から4時間できるわけさ。ワー¹⁹⁾ お金が欲しかったからよ、マイチャー21時まで残って残業してたやっさ。で、夜勤が21時から翌日の6時までだな。夜勤も残業はあるんだけどよ、2時間だけしかないばーよ。で、土・日は基本的に休みなんだけどよ、やりたい人はやってもいいわけさ。平日は、1時間で1,200円で、残業すると1,500円もらえるばーよ。土・日とかやばいぜ。1時間で1,500円で、残業すると1,700円になるばーよ。(男、愛知県、19歳)

証言28 勤務体制は4勤2休の2交代制。朝8時から夜8時で4日間勤務し、2日間の休日、夜8時から朝8時で4日間の勤務、2日間の休日という勤務体制の繰り返しだった。2日間休みといっても、すでに8時間働いたあからの休みだから、実質1日半くらいしか休みってなかったよ。朝8時までとか変な時間に働くから、毎日眠かったよ。(男、三重県、25歳)

証言27のようにお金儲けに徹している人は残業も厭わなかったが、残業の強制に不満を感じる者

や、証言28のように不規則勤務で体調の不調を感じる者もいた。証言の中には製造現場の人員状況を表すものもある。

証言29 23人で一つのラインで、23人中20人が沖縄出身なんだー。18歳から32・3ぐらいまでの人たちで、方言や訛りでしゃべりまくりですごい楽しい。雰囲気はとってもいいよ。(女性、岐阜県、19歳)

証言30 外国人がたくさんいて、時々話してきて全く言葉の意味が分からないから大変で、しかも英語なら多少は分かるのに他の言葉だったから、でーじ²⁰⁾ 困ったやっさあ。(男、岐阜県、19歳)

製造現場には、証言29のように沖縄出身者が多数を占め、方言や訛りを遠慮なく喋ることができたところもあれば、証言30のように南米からデカセギにきた日系人たちと一緒に作業を行い、コミュニケーションの面で困惑をしているところもあった。いずれにせよ、製造現場では沖縄出身者と日系人が同じラインで単純作業に従事していたこと、彼らが労働市場の中で、労働力の置き換えが容易な最も弱い非正規雇用層に位置づけられていたことが伺える。

2. 日常生活の状況

ここでは、季節労働者たちがどのような日常生活を本土で送っていたのか、その生活状況の実態を、インフォーマントの証言をもとに再構成する。

証言31 宿舎はめっちゃめっちゃ上等だったよ。部屋は広いし、きれいだし、お風呂とかもきれい

だった。何より仕事場まで歩いて5分だったから通勤が楽だったよ。(女性、長野県、28歳)

証言 32 一室に3部屋あって、俺は4、5畳の部屋でテレビ、クーラー、布団があるだけの本当に寮の部屋って感じの生活部屋で、寮自体には何百人って人がいるから色々決まりもあって、自炊は禁止、お風呂は時間規定の大浴場での入浴、冷蔵庫も1つを3人共同、洗濯機も共同などの赤の他人とのほんとに共同生活だったね。(男性、三重県、18歳)

証言 33 寮は、ルームメイトの子がたまたま同じ沖縄の子だったから、気楽な感じで楽しかった。食事もまあまあ美味しかったし。でも、お風呂は最悪だった。お湯がちゃんと出るとこが、一箇所しかなくていつも長蛇の列ができていた。だから、並ぶの大変だから、水風呂ばかりで。水風呂入るたびに、家に帰りたくなった。(女性、愛知県、20歳)

生活の拠点となる寄宿舎は、季節労働者にとって重要な空間である。証言 31 のように新しく綺麗な施設なら満足感が高まり、証言 33 のように施設に不備があれば、里心がつきっかけとなるのである。また、部屋は相部屋である場合が多く、ルームメイトとの相性が大切になる。また、証言 32 のように細かな規則を守り、トイレなどの共用部分では、気を遣う必要があった。

証言 34 月曜日から金曜日はずっと同じ生活よ。朝起きて、仕事に行って、仕事が終わってすぐ帰って。してから、洗濯して、お風呂入ってから、ご飯を作って食べて。んで、次の日のご飯の買い物に出かけてた。買い物からお家に着いたらそっこいで爆睡さあ。土曜日は、休日出勤が多いから、平日みたいに朝起きて、出勤して帰ってきてただけど、その後お風呂入ってから友達なんかと飲みに行ったよ。日曜日は、いつも二日酔い。必ずとっていいほど二日酔いしてたさあ〜。買い物しに行ったりもしたよ〜。日常生活って言ったら、ほとんどこれの繰り返しさあ〜。(男性、愛知県、22歳)

証言 35 社員食堂の昼ごはんは、寮の自分で作る晩ごはんは、仕事の後の風呂が最高の楽しみ

だった。仕事して、食べて寝るだけの生活だった。(男性、愛知県、18歳)

多くの証言から、季節労働は製造現場での長時間・単純労働のため、精神的・肉体的疲労感が強く、証言 34 のように、平日は帰宅後に食事と洗濯の後は睡眠確保に努め、休日は買い物や飲み会など気分転換を図っているのが一般的であった。証言をまとめると、寄宿舎を拠点に色々な活動はしているが、インフォーマント自身は単調な生活の繰り返しとの認識が強い。

毎日の生活の中で、友人関係は重要である。特に、家族や郷里・沖縄の友人と離れて、本土の慣れない土地で生活しているため、孤立しないためにも友人を求める傾向が強い。

証言 36 友達にはぜんぜん不便しなかったスよ。同じ持ち場の北海道の29歳の人、俺の隣の部屋だった同年齢の社員の人とか、結構友達は作れた。だから人付き合いに関しては苦労しなかったし、むしろ楽しかった。一緒に外食しに行ったり、ゲームしたりして遊びましたね。(男性、愛知県、20歳)

証言 37 めっちゃ仲良かったぜ。年代は違うんだけどよ、普通の友達みたいな感覚だったやっさー。だいたい24歳ぐらいが多かったんだけどよ、1番仲良くしてたのは32歳の人だったやっさー。あの人が鍋パーティーしようって言ったらみんなが集まってくるばーよ。しに²⁾楽しかったぜ。(男性、愛知県、19歳)

証言 38 仕事内容は単純作業なので面白くなく、そのことが余計に疲れを蓄積させた。そんな疲れを癒してくれたのはそこでできた友達で、そのときに友達の大切さというものが身にしみてわかった。(女性、愛知県、20歳)

証言 39 友達もできない自分は、毎日働いてはご飯食べて寝るの繰り返しで、ノイローゼになりそうな毎日だった。ホームシックにかかり、毎日(沖縄の)友達に電話したよ。(男性、愛知県、19歳)

多くのインフォーマントは比較的容易に移動先で友人を作っている。多くは年齢が近い沖縄県出

表5 契約条件との相違

評価	金銭面の条件			勤務面の条件			日常生活面の条件		
	全体	直接雇用	間接雇用	全体	直接雇用	間接雇用	全体	直接雇用	間接雇用
	N=108 %	N=71 %	N=37 %	N=109 %	N=68 %	N=41 %	N=103 %	N=65 %	N=38 %
条件よりも良かった	14.8	19.7	5.4	4.6	4.4	4.9	2.9	3.1	2.6
条件通りだった	60.2	64.8	51.4	67.0	80.9	43.9	78.6	86.2	65.8
条件と違い悪かった	25.0	15.5	43.2	28.4	14.7	51.2	18.4	10.8	31.6
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

(聞き取り調査より作成)

身者同士であるが、証言36のように本土出身者や、証言37のように年齢差がある人とも仲良くなる場合も珍しくなかった。戦前・戦後を通して、本土出稼ぎ先では沖縄出身者が差別を受けていた事例が多く報告されているが²²⁾、今回のインフォーマントの証言からはそれは全くみられず、交友関係の悪さは出身地の問題ではなく、個人の性格の問題と認識されていた。証言38にみられるように、友人は季節労働による肉体的・精神的疲労を癒してくれる効用があるため、証言39のように、性格的に友人が作れない場合は、ストレスの発散ができずに精神的に追い詰められていく事例もみられた。

3. 就業と日常生活に対する評価

沖縄県出身の季節労働者は、職場での労働や日常生活に関して、移動前後でどのように感じて評価しているのだろうか。本節では、移動前に現地選考会で求人企業の採用担当者から示された雇用条件が、実際にはどうだったのか、ここでは金銭面、勤務面、日常生活面について聞き取り結果を集計して(表5)考察してみる。

まず、金銭面の条件については、全体の75.0%が移動前に提示された「条件通りだった」(60.2%)、あるいは「条件以上に良かった」(14.8%)と証言している。しかし、25.0%のインフォーマントは「条件と違い悪かった」と感じている。

証言40 正直言って、思った以上に給料が高かったやっさー。最初月25万って聞いてたけど、残業を毎日して1日13時間労働。休日出勤もして40万もあった。あれはよかったね。(男性、

愛知県、24歳)

証言41 求人情報誌には、1ヶ月で27～30万とあったのにも関わらず、手取りでもらえたのは結局18万か19万だった。派遣会社に「1カ月に20万円は欲しい」という話をしていて、会社側も「多分もらえるはず」といったようなあいまいな答え方をしていた。それが結局、働いてみると、20万に達することはなくて、良くて18,19万だった。悪いときは、16,17万だった。(男性、三重県、23歳)

当時の求人情報誌では、例えば「月30万円可」という表記がされている場合、これは出勤日を全て働いた分の基本給と決められた日数の残業代のほかに、入社祝いや満期退職慰労金の総額を月割りした金額も加わって算出された数字である。そのため、病気で欠勤した日の分は給料から引かれるうえ、満期退職慰労金分などは毎月の明細書には現れない。そのため、証言40のように、追加の残業や休日出勤をしない限り、求人情報誌に書かれた提示金額には届かない。そして、そこから寄宿舍代や各種労働保険料、税金など引かれた手取り金額はさらに低くなる。証言41は支給額と手取りの違いを理解しておらず、残業がほとんどなかったため、期待していたより少ないと感じた事例である。

勤務面については28.4%が、寄宿舍など日常生活面については18.4%のインフォーマントが「事前条件と違い悪かった」と感じている。次の証言42と43は勤務面、44は日常生活面を含め全ての条件が違っていた、と不満を表明した証言である。

表6 作業現場における職場の人間関係の評価

評価	全体 N=97 人	性別		雇用形態		全体 N=97 %	性別		雇用形態	
		男性 N=61 人	女性 N=36 人	直接 N=58 人	間接 N=39 人		男性 N=61 %	女性 N=36 %	直接 N=58 %	間接 N=39 %
		良かった	34	20	14		38	28	35.1	32.8
普通	53	32	21	23	14	54.6	52.5	58.3	60.3	46.2
悪かった	10	9	1	3	1	10.3	14.8	2.8	8.6	12.8

(聞き取り調査より作成)

証言 42 正直言って、でーじ違った。事前の説明ではイイことしか言わなかった気がする。作業内容の説明も実際行ったら違うし、きっと紹介する人はわかったらんはず。むしろ、紹介して行かすことが仕事だから、行かしちゃえばいいって感じなのかも。(男性、三重県、23歳)

証言 43 昼勤務でできるって言ったのに、昼夜の交互の勤務だった。友達と一緒にできるという話だったのに、同じ部署っていうだけで階は全然違っていた。(女性、愛知県、19歳)

証言 44 面接の時と話が違う。一人部屋だから行くって決めたのに、なんで相部屋だば。意味わからんし。仕事内容も違う。給料35万ないし。20万ちょっとしかない。詐欺だよ。(男性、岡山県、20歳)

事前の雇用条件への評価は、求人企業との雇用形態の違いが大きい。すなわち、製造企業が季節労働者を直接雇用した場合、条件違い率は金銭面で15.5%、勤務条件面で14.7%、日常生活面で10.8%であるのに対して、業務請負企業や人材派遣企業が季節労働者を採用する間接雇用の場合、条件違い率はそれぞれ43.2%、51.2%、31.6%となり、後者が前者よりも2.8倍～3.5倍の範囲の中で高くなっている。特に、勤務面に対して、インフォーマントの半数以上が「事前条件と違い悪かった」と感じている。

直接雇用の場合、製造企業は自社の作業工程に合わせた採用計画を立案するので、条件面の違いは相対的に少ない。これに対して、間接雇用で条件面の違いが多くみられるのは、作業内容や作業量が委託元や派遣先企業の都合により変更するので、業務請負企業や人材派遣企業が沖縄での現地

選考会で提示したような条件通りにはならないため、と考えられる。そして、雇用主と作業事業所の組織が異なるため、証言42にみられるように、沖縄に駐在する採用担当者自身が正確な勤務条件を把握していない可能性が高い。そもそも業務請負企業や人材派遣企業は、変動する受託事業量に対応するため、常に余剰人員を確保しておく必要がある。受託量が少ない時は、季節労働者は待機が指示され、その間は収入が得られない。これらの業界が抱える構造的な問題といえよう。

季節労働では人間関係も重要である。職場内で対上司や対同僚との人間関係が「悪かった」と評価する人は全体で10.3%であり、性別では男性(14.8%)が女性(2.8%)より相対的に高かった(表6)。雇用形態別にみると、間接雇用の「悪かった」評価は12.8%で、直接雇用の8.6%よりも5ポイント程度高いが、先述した契約条件との相違への不満を考えると、職場内の人間関係の悪さは低いといえよう。

証言 45 これねー、言いづらいんだけど、小隊のリーダーと、簡単に言うと上手くいかなかった。この人が結構短気なんで。仕事のミスとかできなかったら教えてくれればいいものの、なんでわかんねーんだよとか言ってきたり、わからなかったら聞けって言うておきながら聞いてみたら前言っただろって言われたり。さんざんいじめられた。耐え切れなくなって、小隊をまとめる課長のところに直接行ってゴメンナサイって言って辞めた。(男性、愛知県、22歳)

職場の人間関係が悪いと感じる相手の多くは、証言45のような同じ作業グループのリーダーで

ある。リーダーからの叱責や厭味などに、人間関係の悪さとストレスを感じているのである。これはリーダー個人の人間性によるところが大きい、リーダーもグループ全体の作業ノルマを時間通りに完遂させなければならないため、精神的にゆとりが無く、作業に慣れない部下に感情をぶつけていることも考えられる。

これまでみたように、単調な作業への不満、金銭面や勤務条件への不満、人間関係の不満など様々な要因で途中離職者は後を絶たない。インフォーマント121人のうち、17.4%にあたる21人が契約期間の途中で離職している。また、この数字が高いか低いかは判断できないが、採用担当者への聞き取りによると、沖縄県出身者に特有の離職パターンとして、友人グループと一緒に季節労働に行った場合、そのうち一人が何かの理由で離職して沖縄に戻ると、他の友人もそれにつられて離職が相次ぐことを指摘している。離職の連鎖反応が見られるのである。

離職率を性別にみると、男性16.9%、女性18.0%で差異は認められない。これを雇用形態別にみると、直接雇用が9.6%に対して間接雇用は29.2%に上っている。これは先述した通り、間接雇用の場合は採用時の契約条件と金銭面や勤務面などで「条件と違い悪かった」という評価が相対的に高いため、それが離職率の高さにつながっていると考えられる²³⁾。

V. 季節労働経験から得たもの

季節労働の契約期間を無事終えたインフォーマント108人のうち、88人までは雇用契約を更新せずに沖縄県に戻っている。それ以外の20人は引き続き雇用契約を延長しているが、7人は半年間で延長を終了しており、半年を越えて延長した者は13人で12.0%に過ぎない。いずれにしても、今回のインフォーマントは、最終的に全員沖縄県へUターンしている。

結局、季節労働でどれくらいの収入を得たのだろうか。インフォーマント77人からの証言によると、最低は10万円から最高は900万円であり、平均は169万円であった。契約期間を満了まで務めた60人の平均は188万円、途中離職をした17

人の平均は103万円である。

さて、沖縄県に戻ってきた季節労働経験者は、本土での季節労働経験に対してどのように評価をしているのだろうか。インフォーマントに「総合的に判断して季節労働に行ったことは良かったかどうか」を聞き取りした結果、回答を得た108人中、88人(81.4%)までが季節労働に行き良かったと評価している(表7)。しかし、その良かったという評価の意図は様々である。

証言46 総合評価としては、俺的には全然OKです。お金貯める目的でトヨタまで行って、実際140万貯めれたから全然OKスよ。仕事内容はハンパじゃなかったけど、休みもちゃんとあったし。(男性、愛知県、20歳)

証言47 よかったさ。だって友だちいっぱいできたし。いろんな所から人くるから、他の県のこと色々わかったし。よかったさ。悪いところは別に何もなし。マル。五重マル。(女性、兵庫県、19歳)

このように、無条件で季節労働経験に対して高い評価を与えているインフォーマントもいる。証言46は目的としていた金銭獲得が達成できたことに対して、証言47は本土出身の友人が作れたことや見聞が広がったことに対して、高い満足感を得ている事例である。季節労働を経験して個別に評価していることを集計してみると、男性は「多くの収入が得られたこと」を、女性は「多彩な人間関係を経験したこと」が最多であった。

さらに、季節労働経験に対する多くの証言は次のようなものであった。

証言48 自分行ったらよかったと思っているよ。何よりも自分で生活する大変さや、親の有り難みが身に染みてわかった。だけど、季節は若いうちにしたほうがいいよ。何でかっていうと、確かに給料はいいけど、生活は不規則だったし、体調管理も大変で、女性の体にはあまりいい仕事だとは思わないからね。だから、自由な身である若いうちに済ませるほうがいいと思う。総合評価として、一度は経験したほうがいいけど、できればもう二度と行きたくないです。(女性、

表7 季節労働に対する総合評価

評価	性別		学歴別		雇用形態別		全体 N=108 人	性別		学歴別		雇用形態別		
	男性	女性	中等	高等	直接	間接		男性	女性	中等	高等	直接	間接	
	N=64 人	N=44 人	N=77 人	N=25 人	N=66 人	N=42 人		N=64 人	N=44 人	N=77 人	N=25 人	N=66 人	N=42 人	
非常に良かった	13	6	7	10	3	10	3	12.0	9.4	15.9	13.0	12.0	15.2	7.1
どちらかといえば良かった	75	45	30	52	18	47	28	69.4	70.3	68.2	67.5	72.0	71.2	66.7
普通、どちらとも言えない	9	8	1	7	2	5	4	8.3	12.5	2.3	9.1	8.0	7.6	9.5
どちらかといえば悪かった	8	2	6	6	1	2	6	7.4	3.1	13.6	7.8	4.0	3.0	14.3
非常に悪かった	3	3	0	2	1	2	1	2.8	4.7	0.0	2.6	4.0	3.0	2.4

(聞き取り調査より作成)

静岡県, 20歳)

証言 49 まず、視野が広がった。色んな考えとか物があるんだなあ～って思った。例えば、沖縄で“当たり前”のことが、内地では“当たり前”じゃないわけ。みんな全然考え方が違ったさあ。あと、沖縄の良さが分かったから、良かったなあ。内地は時間にきっちりしすぎてて、全然自分の時間とか、ゆとりが無かった。こんなのは若いうちに経験しておくべき。若いときはいっぱい色んな経験積んだ方が良いからさあ。
(男性, 愛知県, 22歳)

証言 50 良い面と言えば、お金を稼げることと、もうひとつは経験です。私にとっては一人暮らしは初めてでしたし、知らない土地を知ることでもできました。それに、世の中にはほんと変わった人がいるのだということをつくづく感じました。貴重な経験です。総合的に評価するならば、自分的には80点です。やはり期間限定ということが大きいんですけど、いい思い出です。
(男性, 三重県, 23歳)

VI. おわりに——季節労働経験による本土観——

前章の証言 48～50の3人に代表されるように、彼らが季節労働を評価するのは、仕事内容や仕事経験を評価しているわけではなく²⁴⁾、「自分で生活する大変さ」や、本土の製造現場は「時間にきっちりしすぎて」いてゆとりが無いというに、人間的に「変わった人」が多い²⁵⁾、という負の見聞をしたことに対してである。すなわち、季節労働を経験した沖縄県出身者たちは、契約期間中における

様々なネガティブでインパクトがある見聞を通して、その反動として沖縄の人や社会の良さを再認識し、そのような再認識をさせてくれた本土での季節労働の「経験」を評価しているのである。そのため、季節労働による本土経験を「こんなのが」と表現し、「若いうちに済ませる」のがよく、「期間限定」だから「いい思い出」にしておけるが、「できればもう二度と行きたくない」ものなのである。

寄宿舎やアパートで共同生活をしながら3交代で不規則な勤務に従事するような労働、職場では上司に監督されながら、日系外国人と一緒に、技能や経験もほとんど不要な単純作業を、秒単位のノルマで確実にこなさなければならない労働というのは、現代日本の職場環境としてはむしろ少数派で特殊な世界である。本土の若年世代の多くは、製造現場での作業経験はないし、そのような職場環境を想像したこともないだろう。

確かに、沖縄県出身の季節労働者が経験した「本土」は、極めて特殊な世界であるが、しかし、彼らはそこしか経験していないので、自分が見聞したことが本土の社会の全てであり、本土の人間なのだ、と一般化していったとしても不思議ではない。人文主義地理学者のイーファー・トゥアンはその著書『空間の経験 身体から都市へ』で、「人は、人生のなかで珍しい経験、ありふれた経験を取りまぜ実に多様な経験をするのであるが、空間と場所に関する感情と観念は、そのような人生の多様な経験を通して作られていく」(トゥアン 1993: 40)と述べている。

「本土に行くことは島の人からだど憧れだし、一

回生活してみても本土に住もうか考えてみるのもいいかな～」と期待して本土に行ってみると、「沖縄で“当たり前”のことが、内地では“当たり前”じゃなく、「ほんと変わった人がいるのだということ、つくづく感じ」ることになる。本土経験により「本土は変な社会で、変な人が多い変わったところ」と確信され、「やっぱり、沖縄はいいところ」なのだとは再認識できたのである。インフォーマントたちが語った証言からは、本土での季節労働経験が彼らの本土観と、それに相対する沖縄観を醸成、強化したことが読み取れるのである。

本研究にあたり、貴重な証言を提供していただいたインフォーマントの皆さま、調査協力していただいた琉球大学および沖縄国際大学の学生の皆さまに感謝いたします。

(受付 2019年4月30日)

(受理 2019年6月20日)

注

- 1) 社会学ではこのような証言を生活史と呼び、生活史研究が盛んである。一例をあげると、那覇都市圏にみられる人口還流現象の社会・文化的特性を生活史法により解明した谷(1989)の研究がある。
- 2) 証言(証言)を多く収集し、それを整理・データ化することで、定性的分析と定量的分析の両アプローチから行った研究として、宮内(2015)がある。
- 3) 例えば、八木(1987)や渡辺・石川(1988)、宮内(2009a)。
- 4) インフォーマントには、学生による聞き取りが大学の教育や研究の一環で行われていること、聞き取りの中で話したことは記録され、今後大学の講義や学会、学術雑誌などで証言が匿名処理をしたうえでそのまま公表されることに関して調査学生から説明し、承諾を得ている。
- 5) なお、調査直後の2008年9月に起こったリーマンショックの影響で、沖縄からの季節労働移動がほぼ皆無となる。
- 6) 沖縄労働局職業安定部編『職業安定行政年報 平成20年度』の統計による。職安経由で就業しない季節労働者もいるため、その数は職安統計値以上になることに留意する必要がある。
- 7) 2003年6月に成立した改正労働者派遣法では、2004年3月より物の製造業務についても自由化、すなわち製造派遣が解禁された。これにより、人材派遣業者が季節労働市場に参入することになった(宮内 2009b)。
- 8) 沖縄労働局職業安定部編『職業安定行政年報 平成19年度』の統計によると、2007年度の沖縄県からの県外就職者7,773人の移動先は、愛知県が5,119人で全体の65.9%を占めていた。
- 9) ガソリンスタンドのこと。
- 10) 沖縄県では鹿児島以北の46都道府県を表す呼称として、「内地」「本土」「ヤマト」などがある。このうち本研究では、本土の呼称を用いる。
- 11) 沖縄県内最大手のスーパーチェーンである。
- 12) 自分たちが生まれた沖縄のことを「島」「シマ」と呼んでいる。
- 13) ジンは銭、お金のことである。
- 14) マジはとても、てーげーはいいかげんの意味である。
- 15) 就職祝金のこと。季節労働者の需要が強まると、求人企業は前金で支払える就職祝い金の金額を高く提示して労働者の確保に努めている。2007年下半期では、就職祝い金は10万円程度まで上がった。
- 16) ねえねえは姉の意味である。
- 17) このうち、直接雇用は73人、間接雇用は39人である。
- 18) なお、仕事の単調さについては95人から証言が得られ、そのうち82人が苦痛であったと語っている。
- 19) ワーは私はの意味、マイチャーは毎日の意味である。
- 20) でーじはとてもという意味である。
- 21) しには、(死ぬほど)大変、ものすごいという意味である。
- 22) 一例をあげると、『名護市史本編・5 出稼ぎと移民III』によると、戦前期に本土の紡績工場では、「沖縄出身者は新潟、鹿児島、長崎など同僚である他県出身女工たちから「リュウキユウ、イモクイ、ブタ」などと蔑まれケンカをしている。琉球人であることを原因とした他府県人出身者とのトラブルは日常茶飯事であった」(大城 2008: 54)。また、1961年に琉球政府職業安定課が本土就職者とその事業者に行ったアンケートでは、回答者325人のうち、「差別あり」と回答した者は68人で全体の20.9%であった(職業安定課 1962)。
- 23) 金銭面で「条件が違い悪かった」と答えた27人の離職率は25.9%であった。さらに、日常生活面で「条件が違い悪かった」と答えたインフォーマントの離職率は31.6%と高く、勤務面ではそれが36.7%までに上がる。このことから、契約条件との相違と離職率とは関連が強いこと、金銭面よりも仕事そのものの勤務面での条件の違いが離職率と関係していることが明らかになった。
- 24) 今回のインフォーマントで季節労働の仕事内容や仕事の仕方を評価した人は皆無であった。それどころか、「季節労働をしたけど、仕事として得たものは何もない」とか、「何も(技能的に)身に付けることができず、次の仕事に生かせない」というマイナス評価が強かった。筆者は日本にデカセギ経験のある日系ブラジル人たちにも、日本の製造現場での労働についてその評価を聞き取りした(2012年2月於サン

パロ市内)。日系ブラジル人たちは、日本の生産管理システムの素晴らしさ、チームワークと協調性を重視する現場の強さを評価しており、日本のデカセギで経験して身に付けた様々な仕事の仕方は、今後の（職業）人生で必ず役に立つ、とほぼ全員が証言していた。同じ製造現場での労働体験への評価であるが、沖縄出身季節経験者と日系ブラジル人とは極めて対照的である。このような違いがなぜ生じるのかは、今後の課題としたい。

- 25) 自分たちと同世代の本土府県出身者の特異な性格や行動に関して多くの証言が寄せられた。沖縄県出身季節労働者たちには、相当印象に残る経験だったと推察される。

文 献

- イーファー・トゥアン著、山本 浩訳 (1988) : 『空間の経験 身体から都市へ』 筑摩書房。 Yi-Fu Tuan (1977): *Space and Place: The Perspective of Experience*. University of Minnesota Press, Minneapolis.
- 大城道子 (2008) : 国内出稼ぎ。名護市史編さん委員会編『名護市史本編・5 デカセギと移民 III 出稼ぎ＝移民先編(下)』名護市役所。 43-134.
- 谷 富夫 (1989) : 『過剰都市化社会の移動世代——沖縄生活史研究——』 広島女子大学。
- 堤 研二 (1987) : 過疎山村・大分県上津江村からの人口移動の分析。人文地理, 39-3, 1-23.
- 堤 研二 (1989) : 人口移動研究の課題と視点。人文地理, 41-6, 41-62.
- 宮内久光 (2008) : 沖縄県における期間工求人企業の地域的活動。沖縄地理, 8, 47-59.
- 宮内久光 (2009a) : 沖縄県から日本本土への期間工移動流の変化。金沢大学文学部地理学教室編『自然・社会・ひと～地理学を学ぶ～』古今書院, 163-180.
- 宮内久光 (2009b) : 沖縄県外で就労する季節労働者募集に関する組織的求人システムの形成と展開。沖縄地理, 9, 27-40.
- 宮内久光 (2015) : 第9章 南洋群島における沖縄県出身男性移住者の移動経歴。米山 裕・河原典史編『日本人の国際移動と太平洋世界 日系移民の近現代史』文理閣, 221-250.
- 八木 正 (1987) : 沖縄からの出稼ぎの動向と特徴。渡辺 栄・羽田 新編『出稼ぎの総合的研究』東京大学出版会, 257-267.
- 琉球政府職業安定課 (1962) : 就職後の動向調査 (本土就職者) —— 結果まとまる ——。琉球労働, 8-3, 38-41.
- 渡辺 栄・石川雅典 (1988) : 沖縄県の出稼ぎ。研究所年報 (明治学院大学社会学部附属研究所) 19 : 21-39.